

関西地域のオペラ活動2021

大田 美佐子

1. 概括：2021年コロナ状況下で模索するオペラ活動—中止・復活・新興

中止・延期と継続・復活への想い

2021年のオペラ界は、新型コロナの影響が続き、延期や中止を余儀なくされた公演もあった。たとえば、堺シティオペラでは、2021年3月20・21日に予定されていたドニゼッティの《愛の妙薬》（指揮：柴田真郁、演出：岩田達宗）が中止、2023年1月に第37回定期公演として上演された。関西二期会では、第59回大阪国際フェスティバル2021の演目として初夏に予定され、関西初の全曲上演だったロッシーニの《泥棒かささぎ》（指揮：園田隆一郎 大阪交響楽団、ステージング：奥村啓吾、フェスティバルホール）が2022年夏に延期になり、93回目を迎えたオペラ公演《オテッロ》では、新型コロナ対策の入国規制により来日できなかったグイード・マリア・グイェダに代わり、柴田真郁に指揮者が交代するなど、演奏者の交代などもあった。

オペラ公演には、演者も裏方も数多いプロフェッショナルが関わるため、舞台芸術に関わる才能の育成にとっても、舞台上演の現場は必要不可欠である。昨年来のパンデミック下で兵庫県立芸術文化センターやびわ湖ホールなど、公立劇場が牽引して積み重ねられてきた感染対策への実験やオンライン上演などに関する工夫が、2021年になると「エンデミック」を見据えての上演の「再開」へと、粘り強く公演を模索する姿勢となって現れた。小ホールや中ホールでのオペラ上演、びわ湖ホールの《ローエングリン》などに見られるセミ・ステージ形式での上演もその試みの一

つであろう。セミ・ステージ形式では、管弦楽団がステージに上がるため、装置の規模は縮小されるが、その結果として、音楽面の美しさをより際立たせる効果もある。

また、新型コロナの衝撃や厳しい状況下にもかかわらず、関西のオペラ発信力の中核を成す、劇場の公演復活も明るい話題であった。びわ湖ホールは《ローエングリン》で、兵庫県立芸術文化センターは《メリー・ウィドウ》で、それぞれの芸術監督の個性が滲む演目で、オペラ上演の復活を遂げた。

市民オペラ、姫路の新作オペラ《千姫》

2021年の後半には、新型コロナのワクチンの広がり、感染対策も進み、地元の劇場でプロの音楽家たちと協働してきた市民オペラの活動も再び活発になってきた。堺シティオペラは《トゥーランドット》を大阪交響楽団とともにセミ・ステージ形式で上演、みつなかオペラは《ドン・ジョヴァンニ》を上演した。2021年9月には、姫路駅に近接する姫路市文化コンベンションセンター内に、2,010席規模の大ホール「アクリエひめじ」が開場し、12月には（公財）姫路市文化国際交流財団の主催・企画制作で、池辺晋一郎作曲、玉岡かおる原作（脚本：平石耕一）による姫路城ゆかりのご当地オペラの新作《千姫》が上演され、合唱には姫路市民も参加した。昨年、みつなかオペラでご当地オペラ《満仲》が再演されたように、ご当地ものは郷里の歴史を伝える文化的記憶でもあり、長く愛される可能性も意義も高い。《千姫》も「物語を音楽として聴かせる作曲が実に巧い。人材の起用なども適切で、これまで数々の地域オペラを手

掛けてきた池辺の経験が作曲、制作の両面で集約されている」(『モーストリー・クラシック』vol.298、2022年3月号 p.137 関根礼子評)と評価が高く、再演も期待される。

巨匠 朝比奈隆の遺産に学ぶオペラ界

2021年は、大阪フィルハーモニー交響楽団や関西歌劇団を立ち上げるなど、関西だけでなく日本の音楽界の巨匠でもある朝比奈隆の没後20年でもあった。朝比奈は、関西のオペラ上演にも大きな足跡を残し、大阪市北区ではオペラへの取り組みを再考するシンポジウムも開催された。(「マエストロ朝比奈隆 永遠なれ!～没後20年メモリアル～」11月3日、常翔ホール)。また、12月20日には吹田市文化会館メイシアターで、関西歌劇団により、朝比奈隆の訳詞でオペラのアリアを歌う「朝比奈隆訳詞オペラ・ガラ・コンサート」が開催された。字幕が定着する以前に、朝比奈が苦心した名訳が未来のオペラ上演に投げかける問いは大きい。

現代オペラの新たな試み

また、パンデミック下で、元来、上演や受容の規模が比較的小さかった現代音楽のオペラにも新たな光があたり、その収穫は想像以上に大きかった。たとえば、「作品を作る劇場」として実験的でマージナルな催しを多く手がける京都の THEATRE E9 KYOTO では、オペラ《ロミオがジュリエット Romeo will Juliet》が世界初演された。台本は、GPT-2と名付けられたテキスト生成用の人工知能によって、原作のウィリアム・シェイクスピア『ロミオとジュリエット』に纏わる古今東西の膨大な情報から生成され、そのテキストに対して足立智美が作曲をし、THEATRE E9 KYOTOの芸術監督でもある、あごうさとしが演出した。オペラの企画・上演をしたソプラノの太田真紀とギターの山田岳の好演も高

く評価され、令和3年度の文化庁芸術祭大賞を受賞した。また、ホールオペラも手がけてきた大阪のフェニックスホールでは、パリと関西に拠点を持つソプラノの奈良ゆみが、松平頼則作曲、笈田ヨシ構成・演出の音楽詩劇《葵の上一業のゆくえ》を上演した。これは松平頼則作曲のモノオペラ《源氏物語》から再構成した舞台作品であり、コロナ状況下で、作品とは一期一会の場によって変容しつつ展開する存在であることを強く印象づけた。このように、現代音楽の分野でも、その実験性と芸術性で歴史に残る成果があった。

以下に、2021年に行われたオペラ上演について報告する。

2. 2021年に行われたオペラ公演について

2.1. 関西二期会 第93回オペラ公演《オテッロ》(11月27・28日、吹田市文化会館メイシアター大ホール、原語上演・字幕付) 配役などの詳細は巻末で

コロナ状況下でリモートでの作業や指揮者の交代など、種々のアクシデントに見舞われた公演ではあったが、イヤーゴの細川勝、米田哲二、デスデーモナの福田祥子、畑友実子などの歌手陣、柴田真郁指揮の大阪交響楽団も好演した。舞台美術も兼ねる演出のパオロ・パニッツァの舞台は、物語の象徴的な意味も込めて窓枠を効果的に利用したシンプルな舞台。合唱についても、感染対策で人数を減らしながら、第1幕などの迫力ある歌唱が高い評価を得た。(「関西音楽新聞」2022年1月号 横原千史評)

2.2. 関西歌劇団

2.2.1. スプリングオペラ《修道女アンジェリカ》

《ブッチーニ ガラ・コンサート》(6月16日、
兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院 小ホール、
原語上演・字幕付)

【演出：清原邦仁、プロデュース：橘知加子；
清原邦仁、アンジェリカ：黒田恵理、公爵夫人：
西原綾子、修道院長：土岐真弓、修道長：
井岡潤子、修練長：田中玲奈、ジェノヴィエツ
ファ：木村美穂、オスミーナ：結城彩華、ドル
チャーナ：席定真弓、看護修女：仁田依里、
修練女：田中里奈、托鉢修女A：脇本圭奈子、
托鉢修女B：栢森千紘、助修女A：津石晃子、
助修女B：藤本裕貴、ピアノ：關口康祐】

1年延期されていた舞台が上演された。前半はガラ・コンサート、後半がオペラの構成。現役の歌手でもある演出の清原邦仁は、タブーに深く切り込んだ《修道女アンジェリカ》の勘所を押さえ好評。オペラの中盤のアンジェリカと叔母の公爵夫人の場面は、「二人の絶唱と表現主義的で心決るような關口康祐のピアノ伴奏の見事さに息をのむほど」(「関西音楽新聞」4月号 村田英也評)との高い評価を得た。

2.2.2. 第101回定期公演 チレア《アドリアーナ・ルクヴール》(9月25・26日、吹田市文化会館 メイシアター大ホール、原語上演・字幕付)

【指揮：栗辻聡、演出：井原広樹、合唱指揮：
岩城拓也、装置：アントニオ・マストゥロ
マッテイ、振付：大力小百合、照明プラン：
原中治美、衣装プラン：下斗米大輔、音響：
平井英一、舞台監督：青木一雄、合唱：関西
歌劇団合唱部、管弦楽：ザ・カレッジ・オペ
ラハウス管弦楽団、チェレスタ：岡本佐紀子、
バレエ：法村友井バレエ団、アドリアーナ：
吉岡仁美；北野智子、マウリツィオ：清原邦
仁；藤田卓也、ブイヨン公爵夫人：橘知加子；

西原綾子、ミシヨネ：迎肇聡；西村圭市、ブ
イヨン公爵：片桐直樹；武久竜也、シャズイ
ユ僧院長：上辻直樹；中川正崇、ジュヴノ：
西上亜月子；東里桜、ダンジュヴィル：蒔田
奈々穂；福井由美子、ボアソン：岡成秀樹；
近藤勇斗、キノー：富永奏司；伊藤友祐、執
事：近藤勇斗；岡成秀樹】

ブッチーニと同時代の「ヴェリズモ」のオペラ作曲家であるチレアの作品。井原広樹の演出は、「舞台の表裏の距離感や別荘と館の奥行きをうまく使いながら、情熱と嫉妬の愛憎入り組んだ心理劇を面白く効果的に展開させた」と好評を得た。(関西音楽新聞 11月号 横原千史評) また、ヴェリズモ・オペラの魅力である、厚いオーケストレーションやラストの主人公のドラマチックな死についても、アドリアーナを熱演した北野智子の歌唱と相まって、「ダイナミックな高揚」の表現をサポートした栗辻聡指揮のザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団の演奏に賛辞が寄せられた。

2.3. びわ湖ホール

2.3.1. オペラへの招待《魔笛》(1月28～31日、びわ湖ホール中ホール、日本語上演・日本語字幕付) 配役などの詳細は巻末で

オペラ初心者の方には安価に、馴染みの薄かった人々にも良質でわかりやすいオペラを届けているこのシリーズは、びわ湖ホール声楽アンサンブルのメンバー、松森治、清水徹太郎らが主要キャストの一角を担う。公演は4日連続。客演にはザラストロに片桐直樹、タミーノに山本康寛、夜の女王に森谷真理らを迎えた。次期音楽監督でドイツものを得意とする阪哲朗が指揮し、阪とも相性の良い大阪交響楽団がピットに入った。イタリア語全盛の時代に民衆の言葉であるドイツ語の歌芝居「ジングシュピール」としての拘りで、日本語で書かれた台本は演出の中村敬一による

もの。フリーメイソンの「3」という象徴、コメディの要素、高らかに心を表現するアリアなど、「歌芝居」の多義性」を抱擁するモーツァルトの音楽をオーケストラが見事に具現したと評された。（「関西音楽新聞」3月号 鴨原眞一評）

2.3.2 びわ湖ホールプロデュースオペラ《ローエングリン》（3月6・7日、びわ湖ホール大ホール、セミ・ステージ形式、原語上演・日本語字幕付、ライブ配信有）配役などの詳細は巻末で

大がかりな舞台セットや場面転換を必要としないセミ・ステージ形式の上演で、スクリーンと聖堂を想起させる柱によって効果的な空間を現出。計算された合唱とオーケストラ、登場人物の配置によって、ステージングの栗國淳は、人々のファンタジーを飛翔させ、スケールの大きなワーグナーの世界観を体感させる舞台を実現した。

沼尻竜典指揮の京都市交響楽団は冴え渡る名演。聖杯のグラールの動機から始まる前奏曲冒頭の繊細な美にはじまり、第3幕のザクセン軍とブラバント軍が集結する音楽では、四方から鳴るパンダのトランペットの光輝な響きに包まれた。シンプルな舞台に晒された歌手たちの凄まじい声の力に感服した。タイトルロールの福井敬をはじめ、妻屋秀和、森谷真理、小森輝彦、谷口陸美、大西宇宙、対話とモノローグで、それぞれに役柄の輪郭を明瞭に表現した重厚な歌唱芸術は、オール日本キャストでワーグナーをやり遂げられる日本のオペラ界の成熟をも証明していた。

シンプルな舞台だからこそ、ワーグナーの音楽自体にしかけられた物語に注力することで、壮大な世界観を現出させるオペラの醍醐味を味わった。有料配信も行われ、リアルとオンラインの両輪から、エンターテインメントとしてのオペラの広がりが期待される。

2.3.3 オペラへの招待 プッチーニ《つばめ》（10月8～11日、びわ湖ホール中ホール、原語上演・字幕付、アーカイブ配信有）配役などの詳細は巻末で

《ラ・ボエーム》《蝶々夫人》《トスカ》と日本でも愛されてきた著名な作品に恵まれたプッチーニのなかでは、《つばめ》は上演の機会に恵まれなかった。関西では10年ぶりの上演。イタリアものを得意とし、自らも「びわ湖ホールに育てられた」と自負する指揮の園田隆一郎は、その希少な上演機会の理由について、死や殺人などのエキセントリックなドラマの不在を挙げる。その分、舞台全体から醸し出される雰囲気は重要である。演出には中ホールでの登場数も多い知性派の演出家、伊香修吾。装置は二村周作。そのウィットに富み、小粋な風情は、宣伝美術までも徹底されていた。「1920年代のモード都市にして女性の自立や自由の気風が生まれようとしていたパリを舞台とするメロドラマとして巧みに仕立て（…）舞台に透過性の紗幕を使い、幕あけごとに名画風のクレジットや歌手の心象風景などを思い出の残像のように映し出してゆく」（「関西音楽新聞」11月号 村田英也評）。ヒロインのマグダを演じた中村恵理、詩人プルニエ役の宮城朝陽と小間使いリゼット役の熊谷綾乃のコミカルな掛け合いなど、その歌唱を支えた大阪交響楽団の繊細で優美な演奏なども高い評価を得た。（《つばめ》での好演に対して、びわ湖ホール声楽アンサンブル所属の熊谷綾乃に文化庁芸術祭新人賞が授与された）。

2.3.4 沼尻竜典オペラ・セレクション ビゼー《カルメン》(新国立劇場との提携事業。7月31日、8月1日、びわ湖ホール大ホール、指揮：沼尻竜典、東京フィルハーモニー交響楽団、演出：アレックス・オリエ、原語上演・字幕付) 配役などの詳細は巻末で

びわ湖ホールと新国立劇場とが提携したジョルジュ・ビゼーの《カルメン》の演出は、スペインのアレックス・オリエ。舞台美術はアルフォンス・フローレス。

大胆な空間演出が特徴的で、鉄パイプが全体に張り巡らされた舞台は、たばこ工場や居酒屋の煤けた土埃のする19世紀から、近未来的な都市の広場、監獄、ライブハウス、スタジアムへと観客を誘った。その世界が舞台上で完結せず、観客の熱い視線を含んで、現代の社会へと物語を投げかけるのが、オンラインとは違う生の舞台の醍醐味である。

さらに、このカルメン像には、十年前に27歳で忽然と夭逝してしまったポップ界の伝説の歌姫、エイミー・ワインハウスの物語が重ねられたという。異なる音楽ジャンルの視覚的効果とビゼーの管弦楽との身体感覚の差には違和感も生じた。その一方で、谷口睦美が演じるカルメンが、魂の叫びを妖艶で力強い声に乗せ、場を支配し始めると、ロマの自由な生き方を貫こうとする誇り高きカルメン像が自然と立ち上がってきた。砂川涼子が歌う無垢なミカエラとの対比も秀逸。レッドカーペットの場面など、ガラガラとした表舞台と対比されたスタジアムのバックステージに差す夕日の美しさなど、照明技術で視覚的に叙情性が表現された。

圧巻のクライマックスでは、ドラマが丹念に読み込まれたビゼー一流の音楽の修辞法が、沼尻竜典指揮による東京フィルハーモニーによって、見事に解き明かされた。すべてのしがらみから解き放たれ、時代を表象した巨大な舞台セットが消えた後に、残された

ホセとカルメンのすれ違いの二重唱。懇願から怒り、そして絶望へと刻々と変化するホセの心情を、丁寧に積み上げた清水徹太郎の熱唱。そのオペラ的で感傷的なカタルシスと相反して、自由に生きようと声を発したカルメンの死が現代社会に投げかけた問いの重さに、この舞台の凄みを見た。

2.4 佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ2021 喜歌劇《メリー・ウィドウ》(7月16～18・20～22・24・25日、兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール、日本語上演・日本語字幕付・改訂新制作) 配役などの詳細は巻末で

公使館書記ニエグシュには上方落語の長老、桂文枝。領事の妻シルヴィアースには、阪神間文化の重要なシンボルである宝塚歌劇から元タカラジェンヌ、香寿たつきを配役。芸文の夏のオペレッタは関西の地の利を活かしたご当地テイストだけでなく、舞台装置にはサイモン・リマ・ホルズワース、衣裳にはイタリアのステイーヴ・アルメリーギ、そしてピットには完璧なるウィーンのワルツを奏でるウィーン・フィルからのゲスト奏者を迎えたワールドワイドな布陣が特徴である。広渡勲演出のゴージャスなご当地オペレッタの復活は、「アメリカへ渡り、ミュージカルへと展開した総合的エンターテインメント」による楽しい劇場への招待となった。「30分以上に渡る「グランド・フィナーレ」はワルツ「金と銀」の優雅なバレエに始まり、名曲ナンバーで会場を巻き込んでの大ノリ。その弾ける熱気は、コロナの憂さを吹き飛ばしてくれた。」(「関西音楽新聞」8月号 横原千史評)。

2.5. アクリエひめじ オープニングシリーズ オペラ《千姫》(玉岡かおる原作、池辺晋一郎作曲、12月11・12日、日本語上演・日本語字幕付、世界初演) 【演出：岩田達宗、指揮：田中祐子、合唱指揮：船曳圭一郎；井上敏典、美術プラン：松生紘

子、照明プラン：原中治美、音響プラン：平井英一、衣裳プラン：半田悦子、振り付け：小安展子、舞台監督：菅原多敢弘、管弦楽：日本センチュリー交響楽団、合唱：千姫合唱団、千姫：小林沙羅、おちょぼ：古瀬まきを、本多忠刻：矢野勇志、本多忠政：池内響、お熊：井上美和、徳川秀忠：小林峻、お江：尾崎比佐子、宮本武蔵：井上敏典、宮本三木之助：近藤勇斗、松坂の局：伊藤典芳、坂崎出羽守：奥村哲、桂庵：山田直毅、芥川四左衛門：林真衣、奥女中：金岡伶奈】

主役は徳川家に生まれ、豊臣に嫁ぎ、乱世から泰平の世へと波乱の生涯を送った千姫。原作は玉岡おるが書き下ろした小説『姫君の賦―千姫流流』。オペラでは本多家に再嫁した後の姫路での十年を中心に描いた。

まず、回廊を思わせる直線的なデザインの舞台上、豪華な着物の所作の美しさが際立つ。男性の視点から表象されてきた従来の千姫像とは異なり、玉岡一流の千姫には、過酷な運命に傷つきながら、凜として前進する女性のしなやかな強さが描かれている。オペラの千姫は、ソプラノの小林沙羅の可憐で芳醇な声の芸術によって、その魅力的な存在感を飛翔させた。オペラの大家として演劇的なセンスが光る池辺の音楽では、壮麗なスケールの管弦楽の響きを背景に、千姫の繊細な胸の内を表現するテーマがフルートやオーボエで演奏され、巧みに変容しながら全編を貫く。一方、名もなき民衆にも、民謡の土着性を感じさせる力強い歌を与えた。岩田達宗の演出は、壮麗な歴史絵巻というだけでなく、時代を表象し、千姫の光にも影にもなる「民衆」の存在にも焦点をあて、歴史の知的な読み解きの妙を感じさせた。田中祐子率いる日本センチュリー交響楽団、千姫のおつき役、魅力的な「おちょぼ」を演じた古瀬まきをなどの歌手陣も素晴らしい歌唱を聴かせてくれた。

日本語の美しさが際立つ日本語のオペラは、ジャポニズムやオリエンタリズムの枠組みを超えた存在感を放った。

2.6. 《ロミオがジュリエット》ソプラノ・ギター・電子音響のための（11月5～7日、THEATRE E9 KYOTO、全9場、英語上演、世界初演）

【作曲：足立智美、台本：GPT-2（原作：ウィリアム・シェイクスピア『ロミオとジュリエット』）、演出：あごうさとし、出演：太田真紀、山田岳】

日常生活から無意識にAIの技術に触れている現代社会にあって、AIによって脚本が書かれた（生成された）新しい物語との協働は格別に新鮮だ。一見脈略のない言語の連なりが、作曲者、演出家、演奏家たちによる様々なレベルの解釈の多層性から、物語にある不条理、断絶、対立、調和、融合などの様々な関係性を炙り出す。作曲家の足立は、「今まで存在しなかったものを作る可能性がAIにはある。だが、それを人間が理解できるかはまた別の問題。今すべきことは、AIの美意識を人間に分かるところまで拡張すること」（『日本経済新聞』11月30日 山本紗世 文）と述べたという。このプロジェクトは、オペラという一つのジャンルを超えて、現代社会における人間とテクノロジーの関係性についても、大きな問いを投げかける。上演として特に注目したのは、GPT-2というAIの世界と観客の間に、なんらかの感情や美を媒介に橋渡しをするソプラノの太田真紀の表現力である。AIが提供する情報をいかに読み解くかは、受け取り手の読みの深さに依存する。現代音楽に造詣が深く、多様で実験的な音楽の上演を豊富に経験してきたからこそ実現できた妙技、快演であった。

2.7. il Teatro L'alba L'amore (堺シティオペラ、大阪交響楽団) プッチーニ《トゥーランドット》
(12月19日 セミ・ステージ形式、フェニーチェ堺大ホール)

【指揮：柴田真郁、トゥーランドット：並河寿美、カラフ：笛田博昭、リユー：高橋絵理、ティムール：片桐直樹、アルトゥーム：水谷雅男、ピン：榊貴志、パン：清原邦仁、ボン：水口健次、マンダリン：西尾岳史、プーティンパオ：池田真己、警吏：山川大樹；西村明浩、ステージング：橋本恵史、管弦楽：大阪交響楽団、合唱：大阪響コーラス・堺シティオペラ記念合唱団、児童合唱：堺市少年少女合唱団・堺リープズハーモニー；堺シティオペラ Kid's Chor. & ジュニアオペラ、バンダ：SACAY Teatro Banda、合唱指揮：中村貴志】(令和3年度大阪文化祭賞受賞)

2.8. 第30回みつなかオペラ モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》(12月11・12日、みつなかホール、原語上演・字幕付)

【演出：井原広樹、指揮：牧村邦彦、合唱指揮：岩城拓也、装置：アントニオ・マストゥロマッティ、映像プラン：久保田テツ、照明プラン：原中治美、音響コーディネイター：小野隆浩、衣裳：村上まさあき、演出助手：唐谷裕子、振付：生駒里奈、舞台監督：青木一雄、ドン・ジョヴァンニ：榊貴志；迎肇聡、騎士長：山田大智、ドンナ・アンナ：梨谷桃子；森千夏、ドン・オッターヴィオ：島影聖人；中川正崇、ドンナ・エルヴィーラ：和泉万里子；大賀真理子、レポレッロ：松森治；西村圭市、マゼット：下林一也；仲田尋一、ゼルリーナ：村岡瞳；近藤麻帆、管弦楽：ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、チェンバロ：梁川夏子、合唱：みつなかオペラ合唱団】